

平成二十五年夏夏季

全国大学国語国文学会 第一〇七回大会案内・要旨集

期日 六月一日(土)・二日(日)

会場 成城大学

平成二十五年度夏季

会場 成城大学

全国大学国語国文学会 **第一〇七回大会案内**

〒一五七―八五一― 東京都世田谷区成城六―一―二〇

電話 〇三―三四八二―一五三七 (山田直巳研究室〈直通〉)

Eメール yamadan@sei.jo.ac.jp

○同封の葉書に出・欠をご記入の上、五月二十日(月)までに必ず着くようにご返送ください(欠席の場合も必ずご返送をお願いします)。

○六月一日(土)の、昼食代(一,〇〇〇円/常任委員・委員のみ)、懇親会費(一般人,〇〇〇円、大学院生四,〇〇〇円)、レジユメ資料代(一,〇〇〇円)、六月二日(日)の昼食代(一,〇〇〇円)は、同封の郵便振替用紙(口座番号/〇〇―一七〇―九―七二八五四九、口座名称/全国大学国語国文学会夏季大会)にてお振り込みください。

○本大会では委員等の選挙が行われますので、会場で手続きの上ご投票ください。

○出張依頼状が必要な方は、提出先の宛名と送り先を明記の上、左記の当学会事務局へお申し出ください。

〒245―8650 横浜市泉区緑園四―五―三

フェリス女学院大学文学部日本文学科竹内研究室内

全国大学国語国文学会事務局

Eメール zenkoku.ferris2012@gmail.com

FAX 〇四五―三三〇―六〇六七

《交通》

小田急線「成城学園前駅」(快速急行は停車致しませんので、ご注意ください) 徒歩三分

第一日 平成二十五年六月一日(土) 成城大学

常任委員会(11時00分～11時30分)

三号館三階 小会議室

委員会(11時30分～12時30分)

三号館三階 大会議室

選挙 投票日時 六月一日(土) 12時30分～17時30分

投票会場 三〇四教室(三号館地下一階)

大会

受付 12時30分～

開会 13時～

会場 〇〇三教室(三号館地下一階)

開会の辞

会長挨拶

会場挨拶

総合司会／本学会常任委員・中京大学教授

本学会会長・京都市立芸術大学名誉教授

学校法人成城学園学园长・成城大学学長

原 國人

中西 進

油井 雄二

公開シンポジウム(13時10分～17時30分)

テーマ「柳田國男と国語国文学―没後五〇年を超えて―」

基調講演(13時10分～14時10分)

柳田國男の民俗学

国立歴史民俗博物館名誉教授

福田アジオ

パネルディスカッション(14時30分～17時30分)

パネリスト

柳田・折口と国文学研究―物語る主体として―

岩手県立大学盛岡短期大学部教授

松本 博明

柳田・折口と芸能

慶應義塾大学非常勤講師

伊藤 好英

柳田・折口と近代文学研究―想像力の翼―

國學院大学兼任講師

持田 叙子

(コーディネーター) 成城大学教授

山田 直巳

懇親会（18時～20時）

会場 七号館ラウンジ

会費 一般 八,〇〇〇円 大学院生 四,〇〇〇円

第二日 六月二日（日） 受付開始 9時00分

研究発表会 会場 〇〇八教室（八号館四階）

午前の部（9時30分～12時10分）

総合司会／本学会常任委員・中京大学教授

原 國人

日本の国語教科書は中国の大学専攻日本語教育においてどのように用いられているのか―教科書の設問に表れた指導内容の比較分析を中心に―

発表者／早稲田大学大学院助手

田中 祐輔

司会／滋賀短期大学教授

柿木 重宜

越境するテキスト―芥川龍之介『支那遊記』と夏丐尊訳「中国遊記」の中国における意味生成―

発表者／早稲田大学大学院生

顔 淑蘭

司会／専修大学教授

高橋 龍夫

福田恆存・文学と演劇の接続―〈文学と実生活〉の問題を手掛かりとして―

発表者／國學院大學大学院生

長谷川雅美

昭和第一高等学校常勤講師

司会／フェリス女学院大学教授

島村 輝

「反・反骨の大衆作家」としての高橋鐵―『南方夢幻郷』とその周辺資料から―

発表者／専修大学兼任講師

櫻庭 太一

司会／フェリス女学院大学教授

島村 輝

昼食・休憩（12時10分～13時10分）

午後の部（13時10分～15時10分）

総合司会／本学会常任委員・宮崎県立看護大学准教授

大館 真晴

動作の対象を表示する格助詞「を」と「に」

発表者／熊本県立大学大学院生

佐藤 友哉

司会／大妻女子大学教授

吉田 光浩

「係念」の恋―安貴王作歌の位置付け―

発表者／國學院大學大学院生

大谷 歩

司会／同志社女子大学特任教授

寺川真知夫

「布多富我美悪しけ人なりあたゆまひ」―防人歌・四三八二番歌における新解釈―

発表者／香川高等専門学校准教授

東城 敏毅

司会／奈良県立万葉文化館主任研究員

井上さやか

総会（15時20分～16時20分）

授賞式〔学会賞／文学・語学賞／研究発表奨励賞〕

閉会の辞

本大会実行委員長／本学会常任委員／成城大学教授

山田 直巳

成城大学民俗学研究所 特別展―柳田國男の世界―

会場 四号館三階・民俗学研究所・小展示室
期 間 六月一日・二日（両日とも10時～16時）

平成二十五年度夏季

全国大学国語国文学会 第一〇七回大会 公開シンポジウム

テーマ「柳田國男と国語国文学―没後五〇年を超えて―」

「柳田國男の登場によって、国語国文学はどう変わったか」を考えたい。これは、折口信夫の国文学研究も含め、新しい文学運動としての民俗学的研究法の動向を検証することに他ならない。われわれは、このことを通して、国文学研究の一層の深化・拡大をめざし、同時に〈方法論〉の問題―、つまり〈見方／捉え方〉を再考する機会になれば良いと、考えた次第である。

基調講演

柳田國男の民俗学

国立歴史民俗博物館名誉教授

福田アジオ

パネルディスカッション

パネリスト

柳田・折口と国文学研究―物語る主体として―

岩手県立大学盛岡短期大学部教授

松本 博明

柳田・折口と芸能

慶應義塾大学非常勤講師

伊藤 好英

柳田・折口と近代文学研究―想像力の翼―

國學院大学兼任講師

持田 叙子

(コーディネーター) 成城大学教授

山田 直巳

平成二十五年夏夏季

全国大学国語国文学会 第二〇七回大会

研究発表会 発表要旨

【午前の部】

日本の国語教科書は中国の大学専攻日本語教育においてどのように用いられているのか

—教科書の設問に表れた指導内容の比較分析を中心に—

早稲田大学大学院助手 田中 祐輔

本発表では、中国の大学専攻日本語教科書が一九六〇年代から国語教科書と近似関係にある現象(田中「中国の大学専攻日本語教科書に見られる日本の小・中・高等学校国語教科書との近似性の実態—掲載作品の様式・年代・題材の計量分析から—」『計量国語学』二八巻八号)に着目し、国語教育の内容や手法を用いることが強く批判されながらも、教育現場では一貫して国語教科書が参照された内実について、日本の国語教科書は中国の大学専攻日本語教育においてどのように用いられているのかという問いを立て、調査と考察を行う。

具体的には、指導内容は教科書の設問の記述に表れる(八木・伊藤・波多野「タスク(設問)に着目した英語読解の指導法—教科書分析における課題と考察—」二〇〇一年)という立場から、国語教

科書に掲載された課(KT)と同一の文章を扱う主要高年級段階精読用日本語教科書一七冊の課(NT)の設問(NT:計五六六/KT:計一九七)を対象に、一三区分法を用いた比較分析を行った。さらに、得られたデータについて、教師インタビュー・学習者アンケート調査・『教学大綱』『学習指導要領』の記述・各教科書の前書き・先行研究に記述された教育言説、を傍証として用いた上で考察した。結果、同じ文章に対する設問は、同一のものも一部掲載されているが、全体の内容と分量、種別構成、種別割合に著しい異なりが見られた。日本語教科書は、そもそも目的や対象が異なる国語教科書の内容や手法を取り込むために、文章は国語教科書掲載作品から採りながらも、指導内容の面では、大幅に設問を加筆修正し国語教科書を包摂する形で編纂されているのである。こうした指導内容の異同から、第二言語としての日本語の教育において、言葉と文化の規範として参照された国語教科書がどのような役割を期待され用いられているのかを明らかにする。

越境するテキスト

—芥川龍之介『支那遊記』と夏丏尊訳「中国遊記」の中国における意味生成—

早稲田大学大学院生 顔 淑蘭

芥川龍之介『支那遊記』(一九二五・一一)は刊行されて半年で、中国人翻訳者の夏丏尊(xia mianzun)によって、中国に対する批判的な部分を中心に抄訳された。これまで、『支那遊記』の中国における受容について論じた先行研究はいくつか見られるが、夏丏尊の翻訳に焦点を当てて、翻訳テキスト「中国遊記」の中国における受容を考察したものは、管見の限り見当たらない。本発表では新資

料を取り入れながら、翻訳という作業によって変容されたテキストが、原文テキストにとつては想定外の中国という空間でどのように受け止められたかという問題について考察し、夏丕尊の翻訳の姿勢とその取捨選択との関係について考えるものである。

中国における『支那遊記』に対する否定的な受け止め方には、夏丕尊の抄訳が決定的な影響を与えている。実際、夏丕尊の抄訳が発表された直後に、芥川と「中国遊記」への激しい批判がすでに始まっている。しかし、これらの批判的な文章は、いずれも芥川の中国観を批判しながらも、その一部、あるいはほとんどを中国の現状として認めている。そして、批判的言説と当時中国で主流となっていた言説とが何らかの形で連動したことで、『支那遊記』とは異なる新たな意味が生成している。

中国の読者と「中国遊記」のこのような交渉は、抵抗と借用が絡み合った複雑な過程としてある。この過程を検証することは、半植民地文化としての中国の「異種混溶性」を考えることも繋がっており、翻訳テキストの新たな意味生成によって原文テキストの「生き延び」を果たした翻訳者夏丕尊の役割について再評価したいと考える。

福田恆存・文学と演劇の接続

—〈文学と実生活〉の問題を手掛かりとして—

國學院大學大学院生・昭和第一高等学校常勤講師

長谷川雅美

昭和に活躍した批評家・福田恆存は、生涯多彩な活動を展開したが、その中心に置かれたのは、文学と演劇であった。戦前から戦後

にかけて、いくつかの評論・批評を発表して「小林秀雄の跡取り」（坂口安吾）と評された福田は、昭和二十年後半、積極的に演劇活動に取り組みようになる。この時期の福田がなぜ文学と演劇とを接続し活動を展開していったのか、これは重要な問題であるが、現在までの研究で十分な検討がなされたいといいたい。本発表は、福田の横光利一論を手掛かりとして、これを明らかにする。

福田恆存が横光利一を痛烈に批判したことはよく知られている。たしかに福田は、戦前には「横光利一と『作家の秘密』」（『行動文学』昭和十二年二月）で、横光の文学を「天才」になりえない「俗人」による自意識過剰の文学と断じているし、また戦後には、この戦前版を改稿した「横光利一」（『作家の態度』中央公論社、昭和十二年九月）において、横光の文学を「倫理」を欠いた「自己主張」の文学と見て問題視している。しかし、のちの福田が自らの横光論を否定的に思っていたこと、また、横光没後に「横光利一論拾遺」（『世界文化』昭和二十三年三月）を執筆していることは、これまでほぼ言及されていない。

発表では、横光論の変遷を辿りつつ、「横光利一論拾遺」を中心とした福田の言説を考察し、当時の福田が直面したのが〈文学と実生活〉の問題であったこと、それに取り組むために選択されたのが演劇という方法であったことを明らかにしたい。加えて、昭和二十年後半の文壇で演劇が〈新しい文学〉として注目されていたことが、福田の演劇活動を加速させる要因となったことも、福田による私小説批判と関連付けて示したい。

「反・反骨の大衆作家」としての高橋鐵

— 『南方夢幻郷』とその周辺資料から —

専修大学兼任講師 櫻庭 太一

【主旨】

昭和二十五年の著書『あるす・あまとりあ』の大ヒットによって一躍世に名を知られることになった高橋鐵の作家像とその評価については、戦後を中心とした活動とその著書の内容もあり、これまで「反権威、反権力の性研究者」的視点に拠るものが殆どであった。本論では、そうした戦後の著書以上に、高橋が戦前その生業とした広告業界や民間のプロイト精神分析学研究組織・東京精神分析学研究所での活動、そして『オール読物』および『新青年』などの文芸誌に発表した小説作品群こそが、彼の作家としての実像を浮かび上がらせる重要な要素であると捉え、高橋が戦前に刊行した最後の小説集である『南方夢幻郷』（昭和十七年）に収録された作品の解題分析を中心に、周辺資料として同時期に彼が広告業界誌や東京精神分析学研究所の機関誌等に発表した作品とそこから浮かび上がる活動履歴を当てはめながら、高橋の戦前における作家活動の実体と作品創作の背景を解みとく。

【方法】

『南方夢幻郷』初版の収録五作品を基に、各作品の解題を行った上で、同時期に高橋が『日本電報』、『宣伝』（いずれも日本電報通信社刊）などの広告・業界誌および『精神分析』に発表したエッセイ、時評作品の文体と手法、掲載内容との関連性について比較検討を行う。

【結論】

今日、高橋鐵の作家像とその作品については「概要」でも述べたような経緯から「強い反権威・反権力的志向」を持った硬骨の性研

究者としての評価が中心となっている。しかし本論における『南方夢幻郷』とその周辺資料によって示されるのは、むしろ積極的権威や流行への接近と取り入れを図る柔軟性と対応力を合わせ持った「反・反骨の大衆作家」ともいえるべき高橋鐵像であり、この「大衆作家」として高橋鐵を捉える視座こそが、今後の彼の研究において重要なポイントとなるであろう。

【午後の部】

動作の対象を表示する格助詞「を」と「に」

熊本県立大学大学院生 佐藤 友哉

「ボールを蹴る」のように動作があるものを指向するとき、その「あるもの」は動作の対象とされるが、これを表示する助詞は「を」がその代表といつて良いだろう。ただし、「に」も対象を表示することがあり（親に反抗する）、本論は両助詞の使い分けの区別を明らかにすることを目的とする（なお、「家を出る」「駅に行く」などその助詞が場所を表示する場合は考察の範囲から除く）。

従来、対象を表示する格助詞「を」と「に」の差異は、その助詞と共に起する動詞の性質に着目し分析されてきたが、本論ではそれに加え、対象の性質及び、動作と対象との関連性にも考察を加える。

まず動作性についてだが、対象を「を」で表示する動詞は、処置（蹴る）、創る行為（書く）、心理的扱い（愛する）、知覚（見る）、捉え方・把握の仕方（うらやむ）といった「動作が対象に及んだ状態での、動作と対象とが関わるさま」を表すのに対し、「に」で表

示する動詞は「対象に対する主体の態度」（反抗する、くいさがる）、又は「対象への方向性を示す動き」（会う、放水する）を表す（両者を兼ねるものもある）。

対象の性質については、はじめに「に」の方から述べるが、これは①動作の先（人に話しかける、意見に賛成する）、②動作の着点（足に飛びつく、人に会う）、③動作の基準・指標（環境に慣れる、上司にくいさがる）のいずれか、あるいは複数を兼ねるものとなり、①②③は動作の基点とまとめることができる。一方、「を」が表示する対象は①②③のいずれにも該当しない。このことと右記の、対象を「を」で表示する動詞の性質とを考え合わせると、「を」が表示する対象は、動作との関わりの中核にあり、動作と一体的に関わるものと考えられる。

したがって、対象を「を」で表示する動作の方が「に」の場合よりも対象との結びつきが強いといえる。

「係念」の恋 — 安貴王作歌の位置付け —

國學院大學大学院生 大谷 歩

『万葉集』巻四収載の安貴王の長歌体による恋歌は、采女との別離を嘆いた悲恋の物語を内容としている。この二人の別離の事情は左注によると、王が采女を娶ったことで「不敬之罪」に問われ、采女が「本郷」に帰された時に悲嘆して詠んだ歌であるという。その時の王の采女への想いは、「係念極甚、愛情尤盛」であったと伝えられている。ここにみえる「係念」の語は、上代文献では孤例であり、従来出典不明の語として扱われてきたが、小島憲之氏がこれを仏典語であると指摘し、仏に一心に念じる意であるという。確かに、「係

念」は仏典独自の語であり、その出典の一つに五世紀頃撰述された『正法念処経』があり、そこには「十三係念」が説かれている。この「十三係念」には出家者の修行の方法が説かれており、その「第一係念」においては女人に心を寄せることを戒め、「係念」の修行を怠れば「則ち色欲に著す」のだという。出家者の精神的修行において「色欲」を捨てることを教えるのが「係念」の法であり、出家者は「係念」の修行により仏に専心し、女人の迷いから逃れることが出来ると説くのである。

このことからみれば、当該左注の「係念極甚」とは、「十三係念」が第一に挙げて戒める「色欲」に溺れた者を指し、安貴王は仏へではなく、采女の色香に「係念」したということになる。ここには男女の恋愛事件が、「係念」という仏典語を通して仏の戒める「色欲」の物語へと転換され、王の悲恋は仏教的な迷妄の恋愛物語として読み取られることになる。そこには、左注の注記者の立場が大きく物語に関与していると考えられる。

以上のことを踏まえて、本発表では当該左注の「係念」の語が『正法念処経』に由来すること、仏典語としての「係念」により説明される安貴王の悲恋の歌は、仏教の戒める「色欲」の恋歌へと変容したと、さらに、そこには出家者が関与しているであろうことを論じたい。

「布多富我美悪しけ人なりあたゆまひ」

— 防人歌・四三八二番歌における新解釈 —

香川高等専門学校准教授

東城 敏毅

下野国防人歌の四三八二番歌「布多富我美悪しけ人なりあたゆま

ひ我がする時に防人にさす」の歌は、第一句ならびに第三句の解釈がまだ定まっておらず、解釈に揺れがある歌である。

第一句「布多富我美」に関しては、「下野国国守」と考えるのが現在では一般的である。「布多」は、下野国の国府のあった都賀郡の郷名であり、「フタホガミ」は「フタオホカミ」（布多太守）の句中の単独母音「オ」が脱落し、「カ」が濁音化したものと考え、「布多太守」は「布多にいる長官で、下野の守のこと」（武田祐吉『全註釈』）と捉えるのである。ただし、現在でもこの説が定説というわけではなく、契沖以来、多種多様な解釈・意見が提出されている状況である。

しかし、私は新たな次の説を提示したい。

「布多富我美」は、「布多火長」（フタホガミ）なのではないか。

このように考える理由は以下の五点である。

- ① 下野国のみ、「火長」の役職名を持った者が歌を提出している。
- ② 「布多」などの郷名に「火長」が結びつく記述方法が木簡等に見られる。
- ③ 「火長」の「火」を「ほ」と訓むことは、古事記・万葉集中に例があり、また「火長」は木簡で「十上」と記述されることがあり、「長」を「かみ」と訓むことも可能である。
- ④ 下野国防人歌の当該歌の前後は難波津での感慨を詠んだものであり、当該歌だけ出発前の防人任命時のことを詠むのは違和感がある。
- ⑤ 難波津での感慨を詠んだものと考えた場合、第三句「あたゆまひ」にも新たな解釈が可能となる。

平成二十五年夏夏季
 全国大学国語国文学会 第一〇七回大会 会場案内

交通案内

